幼児と繪畫

久保貞次郎

こゝに満五歳になる一人の女の子の繪が五枚ある。これは家だが、家に足がありまた腕が両方に出ている。なかには八本も足があるのがある。またこちらの屋根についているものは何かとたずねたら、リボンだそうである。このように子供が家を擬人化している繪をみて諸君は何というだろうか。諸君の毎日接している子供達のなかにもこういう繪をかく子供はいる筈である。別に珍しい繪ではない。ところで問題は、この手のある家と、手のない家と比べてどちらがよいかという評價については、どう考えるべきか。家に手のない方が、手のある方よりも知能が進んでいる證據であるから、手のない家の繪の方がよいと斷言できるであろうか。

私は幼児の繪畫をみて、一方より片方の方がのぞましい、或はりつぱだという評價は、幼児の心理を充分考察した上でなければならないと思う。ふつう満二、三歳から七歳頃までの幼児の精神段階を「空想の時代」とよぶ。「空想の時代」についてはかの天才ホオマア・レインの獨創的研究によつて、世界ははじめて、最も明らかにその意義を知つたといえるだろう。即ちそれまで赤坊であつた子供が、自分の意志以外にまだ他人の意志というものが存在する、自分の肉體の制限外に自分の自由な活動を制限するものがあるのを、生れて二、三年たつて初めて知るようになる。そこで子供は大人の世界というものがあることを無意識ながら意識する。そして子供の個性が殆ど問題とされない大人という巨人達の世界で、小さくてとるにたりない子供の位置を償うために、子供は空想を用いるのだ。どの子供も自分の周圍が宇宙の大きなということをきかない物や人にみちていて、子供はその間にあつて劣等感を持たざるを得ない。そこで子供は空想によつてこの狀態を逆にし、以前小さく弱かつたのに今や大きく強くなることができるのだ。何故なら子供が空想を振えばこの世界は從順ないうことをきくものになり、人も物も命令した通りのことをするのだから。そして子供には眞實とうそとの間に何等ハツキリした境界がない。空想の時代には神樣も含めて全宇宙が子供の望みに應じてどんな形にもなる。この時代には空想の力をもちいて遊び特に人形遊びをする。また幻想、夢想にふける。

○

この「空想の時代」に子供達がどんな風に人形を取扱うかを見れば、われわれは空想が子供にどんなよい影響を與えるかがわかる。大人は子供にとつて大きすぎ手にあわない。ところが人形は子供の云う通りのことをし、命令された時に御飯を食べる。人形は寢床につかせたり、風呂に入れてみたりすることができ、口答えなどせず萬事强大な主人を尊敬し、自分の地位を心得ている。私が一九三九年ロンドンにいた時、小便をする人形を賣つていたのを見たことがある。こういう人形を使えば子供は思いのまゝの時に、人形に小便をさせることさえできる。子供はこのように人形を用いて自分の思うまゝになる環境をつくることができるのだ。また人形はもつと別の魅力がある。というのは子供達は空想を振いさえすれば、人形に自分達がやつてはいけないことさえも自由にやらせることができるのだから。例えば人形は食事と食事の間に菓子を食べることも、一旦寢床にはいつてから、またとび起きてそこいらを歩き廻ることもできる。また雨が降るのに戸外にいることもできる。こんな具合に人形の所有者は强大で優越しており、精神の大きさによつて充分體の小ささを償うことができるのだ。このタイプの空想によつて子供達は得意と幸福と力とを得ることができる。

しかし「空想の時代」とは子供が空想ばかりしている時代、或は空想ばかりしておるべき時代という意味ではない。それは空想が初めて生れる時代である。空想が唯一の子供の心に働く動機であるというのでなく、主要なる行動の源泉になるという意味である。しかもこの時代に子供がいだくいろ〳〵な空想を充分娛しませないならば、子供ののびようとする精神は傷いてしまい、幼兒が少年少女になり、また大人になる。即ち「空想の時代」がすぎ去つて、次の鬪爭の時代即ち「自己主張の時代」を經て、「協同の時代」「忠實の時代」に達し、やがて成人となる各時代、いつも幼兒的空想がつきまとい、新しい時代の慾望を充分に發揮しようとする衝動が弱められてしまうのである。

○

「空想の時代」は非現實が事實にはじめてつけ加えられる時代である。即ち帶の柄は、飛行の翼であり、軍馬にもなる。ボオル紙の王冠は王樣のあらゆるきらびやかさを備えている。又きたない暗いおしいれは洞窟になり、テエブルの上は山の頂きである。お伽話はほんとうのことであり、人形は話をし、歩き、食べ、又話しかけることもできる、これ等のことは子供にとつて健全な心理的理由があるのだ。即ちこのような空想は、餘り大きすぎ子供の自由にならない世界で、子供のひけ目を償うのである。空想は意志の代用物であり、それはいわば子供の意志を鍛練する役目をする。空想は子供が嘘をつく方法ではなく、子供が生長をする方法である。この時代のつくりごとは有益であり、必要であり、正しいことな

のである。わがホオマア・レインはこのように子供の「空想の時代」を考察した。私が現實の日本の子供達の生活を注意深く眺める時、これ以上にすばらしく子供達の行動を觀察することはできない。

從つて私達が幼兒の繪畫をみる場合、手が屋根に生えているから、その繪はよくないとか、幼稚であるとかいう理由は少しもなりたゝない。勿論屋根に手がはえてなければ幼兒の繪として完全でないなどというわけではない。それでは幼兒の繪畫をみて、賞讃すべきものと、そうでないものを區別する原則は何であろうか。

○

子供にとつて一ばん重要なことは子供が創造的であるということである。子供が創造的に活動することは子供にとつて自由な狀態にいることであり、幸福なことであり、最もはつらつとしている狀態である。そして子供が創造的になるためには、幼兒としては、空想を充分娛しませ、大人が子供の自由を束縛しないことが必要である。從つて幼兒の畫く繪が空想的であつても、それは健全な心理的過程であることを大人は知らねばならぬ。だから幼兒の繪畫を評價するときには、幼兒の繪畫に現れるその精神的特徴を充分知つた上で、次のような原則に立つべきではなかろうか。その原則は、更に生長した年令の子供の繪を評價する場合と少しも異らないものである。何故ならば子供の精神に一ばん重要なものは、創造的精神であり、その創造的精神のみが、子供の繪を評價する際にも唯一つの規準になるべきであるから。

(1) まず繪をかく時の幼兒の心の動きが大切である。

(2) 觀念的な繪というものには子供の獨自な發見というものがない。それはたゞ模倣であり、大人の固形化した、どろ沼のようによどんで動かない觀念を、子供がくりかえしたにすぎない。

私達が子供の時代即ち大正年代に顏のかきかた、笑つている人の顏とか、畫のかき方などという本や、臨畫の本や、またいまでもさかんに賣られている、ぬり繪などは子供の恐るべき敵である。

(3) 幼兒の畫がほんとうに幼兒の強い興味によつて描かれているかどうか、即ち幼兒の獨自な目でみた發見を繪畫の上でしているかどうかを見る。

(4) 繪が生き〳〵として自由であるか。退屈しているのは不幸だ。

(5) 從つて繪の題材が大人から見て何を描いているか言葉で說明できるものばかりでなく、たとえ何だか說明できぬものが描かれていても、それは評價の重要な要素にならぬ。問題は如何に描かれているかという點である。如何に生き〳〵としているかと、いう點である。

(6) 即ち緊張した美しさを表現しているものがもつとも健全であり、創造的である。

私はこゝで全國の幼兒教育にたずさわる諸君が、この幼兒の緊張した美しさを、幼兒の繪畫のなかに、最も敏感に見出すことを期待してやまない。そのためには大人の心にもまた創造的精神が働いていなければ、この仕事はむずかしいことになるだろう。大體私達大人は失敗した人生である場合が多い。このことに氣ずいていない大人は幼兒のよい指導者になれないだろう。

私は日本及び歐米各國の兒童畫を多數見た後に、大人の世界でいままでいわれて來た「人生において子供の時代が最も樂しい時代だ」という言葉が、火星の子供達にとつてはどうかわからないが、今日までの地球上の人類の子供達に關する限りは、一〇〇人のうち九〇人には、あてはまらないという結論に達せざるを得ない。何故なら幼兒の繪も、少年少女の繪も、兩親、其他の大人の抑壓によつてほんとうに生き〳〵しているのは數少ないからである。そして歐米と日本の子供とを比較すると、これは同じ不幸のなかで、何という對比であろう。日本の子供は非常に不幸な感情にみち〳〵している。歐米の子供に日本の子供に比べると幸福の花園に遊んでいるといゝたい位だ。

しかも日本の中等學校の子供の繪は顏をそむけざるを得ない程不幸である。小學校上級生のはそれよりもやゝ明るいが、下級の子供達はまだ〳〵自由なところが殘つている。幼兒の繪になるとはるかにはつらつとして、われわれに希望をいだかしめる。幼兒のこのいくらかの潑溂さをます〳〵のばすように、幼兒の教育に關心をいだいておる人には、幼兒の繪のなかにある生き〳〵した美しさを見出して、熱心な賞讃を與えるべきである。

（五頁よりつゞく）逆にこれらの形式に關する研究が更に實際の場を得て、具體的に一つゞゝ改良せられてゆく素地が得られる。即ち、現在では實驗學校としてのみしか場を持たないこれらの系統的な研究が、一般的に學問として伸びる社會的な地盤が得られるのである。

要するに、教育形式に關する科學的な研究を基礎として、幼兒學校で學年の初めから計畫的に兩親教育のカリキュラムをたて、更に反對にこの場に依存して研究が本格的に進められる事が、現在兩親教育の最も難關となつている形式論の研究の端緒をうる事になる。

以上、私は兩親教育學の建設の一端として、幼兒學校における兩親教育を學問的に打ち建てるために、三つの必要な對象的契機があり、そのうち方法論が特に缺點を持つ事を述べた。しかして、急速には社會教育の改善を望みえない現在、この缺點を除くためには教育方法の各形式を系統的に考察し、計畫的に各學校で實行する事が最も着實な方法であり、且つ、この努力によつて研究がこれらの學校の場を得る事が、現在研究の向上の端緒となるとゆう事を述べた次第である。